

RPA

最近、ごく当たり前に「RPA (Robotic Process Automation)」というキーワードを耳にするようになりました。RPAとは、現在、人手を使って作業している定型的なシステムの操作やデータの入力処理などを識別し、人間と同じように操作を行うソフトウェアの総称です。働き方改革、業務効率化を実現するソリューションとして注目を集めています。インテックは、RPAを業務のデジタル化のベースとなるソリューションとしてとらえ、**全社横断で取り組んでいます。**今回は、RPAとは何なのかについてご紹介いたします。

RPA (Robotic Process Automation) とは、ワークフロー、ルールエンジン、画面認識、スクレイピング^{※1}、光学式文字読み取り装置(OCR) 技術など既存の技術を組み合わせることで、一連の定型業務に対して、人間の作業を代行できるようにした業務自動化の取り組みのことで、産業ロボットのような物理的ロボットではなく、ソフトウェアの集合体です。

RPAはデジタルレイバー (仮想的知的労働者) の形態の一つであり、2015年夏頃から欧米を中心に急速に広まったとされています。日本でも2016年頃より適用事例が出始め、その後、業種・業界や事業規模を問わず、急速な広まりを見せています。RPAの市場予測として、2020年度は約72億円、直近3年間は毎年120%の投資拡大が予想されており2020年までには386億円まで拡大する見込みです(ITR「ITR Market View:AI/RPA市場2017」より)。

このようにRPAが急速な広がりを見せた理由として、次のようなことが考えられます。従来、業務効率化の方法としてはシステムの改修が考えられてきました。RPAによる業務効率化のアプローチは、システムはそのまま、その操作をRPAが代行することにより効率化を実現する考え方です(図1)。大規模なシステム改修を前提としないため、大幅な費用効果向上への期待に加え、24時間365日稼働できる、設定したシナリオ通りに動作するためミスが低減する、といった複合的な効果向上も期待できる点が、積極的な検討につながっているのではないのでしょうか。

多くの企業で取り組まれているRPAですが、劇的な効果をあげた事例もある中で、「期待通りではなかった」、「PoC^{※2}まで実施はしたが、その後進んでいない」といった声も散見され始めているのも事実です。

インテックでは、RPAは「『きっかけ』や『手段の1つ』にすぎず目的ではない」という考え方にに基づき、お客さまの業務を効率化する活動に取り組んでいます。実際に多くのお客さまのRPAを用いた業務改善検討、業務活用に向けたPoCをご支援させていただく中で、RPAの本質はBPR(業務改善)の取り組みであると改めて認識しています。そのうえで、RPAがこれだけ世の中にインパクトを与えている理由は、改善効果を素早く、目に見える形で体感できることにあるのではないかと考えています。「小さな成功」をすぐに見せることで、業務改善の取り組みへの心意気や発想が大きく変わり、結果、ユーザー部門による自発的、自律的な取り組みが継続する業務環境の実現につながるのではないのでしょうか。

急速な技術の進歩と、世の中のネットワーク化の進展により今までの企業の行動様式や、ビジネスモデルは大きな転換期を迎えています。RPAは、徹底的にデジタルを活用し、今までのやり方や経営基盤を変える取り組みを支えるベースの技術と言えます(図2)。インテックは、RPAについて全社横断で取り組むことで、お客さまのビジネスの変革や社会課題の解決に貢献してまいります。

図1：システム開発とRPA化の違い

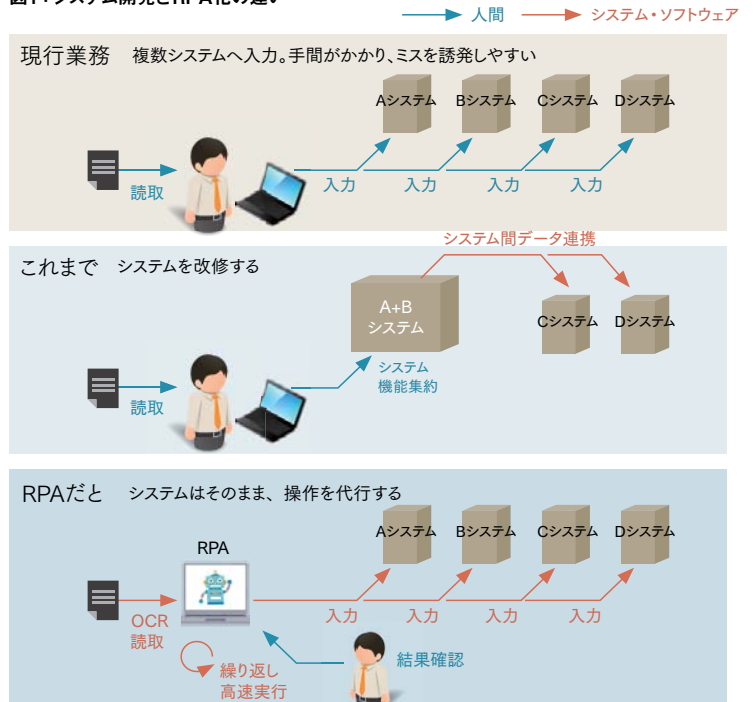
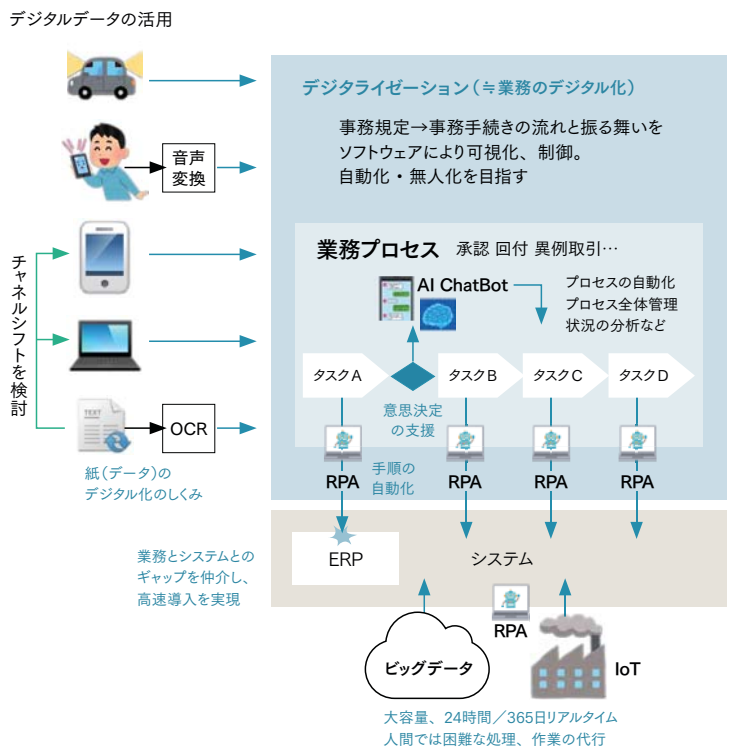


図2：デジタル化におけるRPA



※1スクレイピング:サーバサイドのプログラミング言語を使って外部サーバへアクセスし、そのコンテンツから自分たちの欲しい情報を引き出す手法
 ※2 PoC(Proof of Concept):概念実証